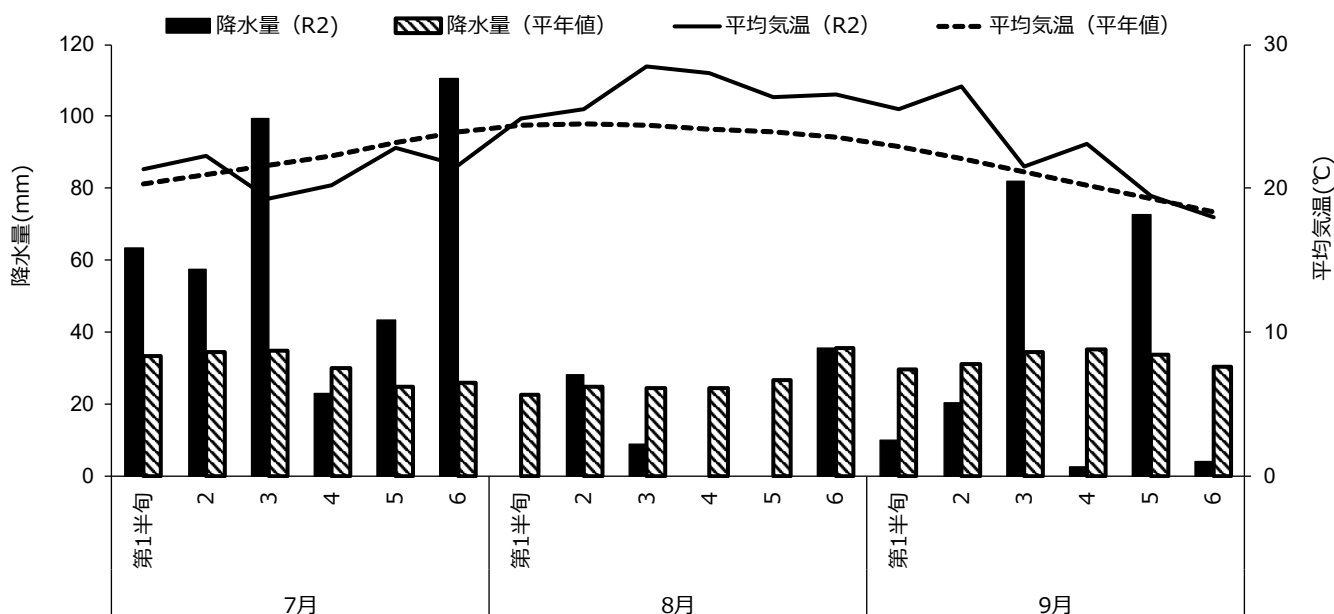


仙台大豆作情報

令和2年度第3号
 令和2年10月7日発行
 仙台農業改良普及センター
 TEL 022-275-8410

1 気象経過 (7~9月の気象)



2 生育概況 (標播)

7月は気温が低めに経過し、降雨が多いため日照時間も少なくなりました。8月は天候が回復し、9月上旬まで高温・多照で経過しました。

生育調査ほの8月31日調査においては、「タンレイ」、「ミヤギシロメ」とも、主莖長は前年より長く、主莖節数は前年より多くなりました。分枝数は、「タンレイ」で蔓化傾向が見られたことから2.7本と前年と比べて少なくなりました。10月7日時点で、「タンレイ」は落葉期、「ミヤギシロメ」は黄葉期に入っています。(管内の一般ほ場においては、「タンレイ」の一部で完全落葉したほ場も見られます。)

表 生育調査ほ調査結果 (8月31日調査)

品 種	調査年	播種期	開花期	主莖長 (cm)	主 莖 節 数 (節/本)	分枝数 (本/本)	成熟期
タンレイ 仙台市宮城野区	本年	5/30	7/25	89.6	15.0	2.7	
	前年	6/ 2	8/ 2	60.8	14.4	4.7	10/16
ミヤギシロメ 仙台市若林区	本年	6/ 2	8/ 4	95.5	17.3	5.0	
	前年	6/ 5	8/ 5	40.0	12.0	3.2	11/6

2 大豆の生育ステージと収穫適期

コンバインによる収穫適期の判定は、穀粒・莖水分がポイントです。莖・莢の色や莢内での子実の振動音、莖の切断音など総合的に判断する必要があります。天候などにより青立ち株（生育が不揃いで、莖葉が緑色のままで落葉していない株）が発生することがあるので、ほ場全体をみて判断しましょう。また、ほ場ごとの生育ステージを把握して作業計画を立てましょう。

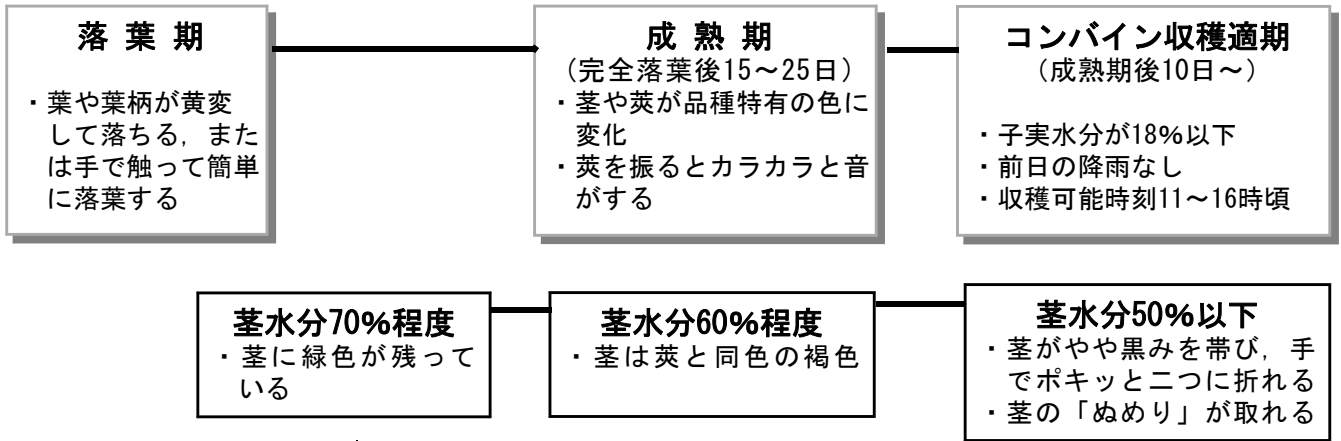


図 大豆の成熟経過とコンバイン収穫適期

3 収穫作業のポイント ～適期収穫と汚粒対策～

(1) 適期収穫を行います。

コンバインによる収穫適期は、①成熟期後10日以降、②子実水分15～18%、③茎水分50%以下(茎の「ぬめり」がなく手でポキッと折れる頃)を目安とします。

子実水分が高い(20%以上)と、つぶれ粒等の発生が、水分が低い(14%以下)と、割れ豆等を主体とした損傷粒が多く発生する傾向があります。また、茎水分が高いと汚粒発生の原因になります。



(2) 刈り高さは、約10cm以上確保します。

汚粒発生の多くの原因は、土の掻き込みによるものです。**汚粒発生を防ぐため、必要な刈り高さを確保して刈り取りましょう。**

(3) 収穫前に雑草を除去し、汚粒の発生を防ぎます。

茎や実の色があるもの(イヌホオズキなど)、大型で乾いていない雑草は、汚粒の発生原因になります。今年は、タデ類やアメリカセンダングサの発生が目立ちます。**収穫前に可能な限り抜き取りましょう。**



イヌホオズキの実

(4) 青立ち株も、収穫前に抜き取ります。

青立ち株は、収穫時に汚粒の原因となるため、できる限り**収穫前に抜き取り**ましょう。

(5) 刈り取り時間は、午前11時～午後4時頃です。

莢や子実水分が高まる時間帯を避け、午前11時から午後4時頃に収穫しましょう。

なお、前日に降雨があった場合は、莢の水分状況を確認してから作業をしましょう。

(6) 作業速度を抑えて、土を掻き込まないようにします。

汚粒発生が一番大きな原因として、「土の掻き込み」があげられます。作業速度はゆっくりとし、**コンバインの刈刃が土を掻き込まないように注意**しましょう。特に「作物収量が多い」、「倒伏している」などの場合はさらに作業速度を抑えて刈りましょう。

4 乾燥作業

- (1) 県産大豆は大粒種の生産が多く、吸水性にバラツキが出やすくなります。加工適性を重視すると、大豆の吸水性に大きな影響を及ぼす穀粒水分と粒揃いが、最も重要なポイントです。
- (2) ほ場によっては、子実水分のバラツキが大きい場合があるので、**こまめに水分測定**を行いましょう。
- (3) 循環式乾燥機等加温乾燥の場合は、**熱風温度を30℃以下**とし、裂皮粒やしわ粒の発生を抑えましょう。
- (4) 平均水分が18%を超えるロットの場合は、さらに熱風温度を落とし乾燥しましょう。
- (5) 仕上がりは、貯蔵、流通・加工適性をふまえ、夾雑物・被害粒がなく、子実水分は13%程度で、よく成熟した粒ぞろいの良いものを目標に調製しましょう。

5 東北地方1か月予報（令和2年10月1日 仙台管区气象台発表）

予報のポイント

○暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

○高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は、東北太平洋側で平年並か少ない見込みです。

秋の農作業安全確認運動実施中（令和2年9月15日～11月30日）

近年、様々な農業機械の普及、農業従事者の高齢化等により、機械操作のミス、過信と慣れによる安易な作業が重大事故に結びつき、依然として農作業死亡事故が発生しています。

県内における今年の農作業事故は、9月10日現在で5件発生しており、いずれも60歳以上の方による死傷事故で、農業機械のうちトラクターによる事故が中心となっています。

大豆のコンバインによる収穫時には、段差や傾斜に注意し、ゆとりをもった正しい操作により事故を未然に防ぎましょう。